

三菱重工業熊本航空機製作所と同第一組立工場について

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生

1 はじめに ～熊本の航空機産業との関わり～

- 熊本の航空機産業は、多様な祖型が複合した形で成立した。
- 熊本の蚕糸業は長野駿平により、製糸教婦「大野ナミ」が山鹿郡宗方村に移った事等により、山鹿蚕糸組合が設立され、県内各地に広範に伝わった。第一次世界大戦は製糸業にも好景気をもたらしたが、昭和5年をピークに釜数が減少し、昭和10年の製糸企業整備、昭和15年の再整備を経て県内工場は20社以下となった。
- その後、中国大陸での戦争拡大により生糸等輸出が減少し、近代設備を誇った上熊本の郡是製糸や熊本・片倉・不知火・来民の各工場が、その施設設備や関係する人員等の再利用して航空機工場に転換した。代表的な航空機会社は、山鹿市「城北航機株式会社」である。
- また、一方では新たな産業である航空機産業に着目し、東肥航空株式会社、古庄航空工業株式会社等は、中小事業所や新興地域財閥等により設立される。
- 現存する第二十一海軍航空廠昭和二十年一月 会社名簿 飛行機部作業係によると国内各地で「229社・工場名」が記載されている。熊本県内では、三陽航機株式会社（熊本工場・八代工場）の他、古庄航空工業株式会社（春竹工場・日宇工場）、西部航空精機株式会社（熊本市大江町）、合資会社藤田鉄工所（熊本市春竹町）、熊本航空工業株式会社（熊本市内坪井町）の「5社・工場名が記載」される。
- 熊本の航空機産業が、全国の生産網に組み込まれた状況が見てとれるが、全容は判明しない。現存施設は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所第一組立工場のみである。



資料1 三菱重工業熊本航空機製作所と健軍飛行場 写真下位
の黒い四角建物が第一組立工場
国立国会図書館蔵

2 熊本飛行場との関わり

- 旧熊本飛行場は熊本市東区健軍町・西原町・戸島町・小山町に所在する。健軍飛行場の別称を持つ。当初は三菱重工業株式会社熊本航空機製造所で生産する重爆撃機「飛龍（キ-67）」試験飛行のための飛行場として設営された。
- 昭和19年4月「飛龍第一号機進空式」時には飛行場諸施設も南・西側に完成し、同6月大刀洗陸軍飛行学校熊本教育隊が、飛行場東側に管理区画を設け開校する。その後大刀洗飛行学校の廃校に伴い、実戦部隊の配備も行われ、昭和20年4月、重爆隊の第六十戦隊の配置に伴い機能が更に拡充する。昭和20年5月の義号作戦では、沖縄に向け「義烈空挺隊」の発進が当飛行場から行われた。昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となり、敗戦時は第六〇戦隊（陸軍重爆隊、その後は百十重爆撃隊と統合し、百七十戦隊に編制替）、第一七独立飛行隊、第五五飛行中隊、第一七四飛行場大隊の配備部隊名が記される。
- 滑走路は、現日本赤十字熊本病院前道路として1500×60m（マカダム舗装）を基盤とし、さらに1500×300・1500×200mの2箇所を設定する。周辺誘導路としては、3000m長が20本設置され、周囲には500名収容の宿舎12棟と軍記録に記されている。
- 飛行場南部隣接の三菱熊本航空機製造所には、義烈空挺隊慰靈碑も陸自施設内に移転されている。また、第六十戦隊の墜落機慰靈碑が大津町外牧畠、西原村宮山の2箇所に建立されている。

3 三菱重工業熊本航空機製作所

(1) 概要

- 三菱重工業熊本航空機製作所は、1942年6月15日名古屋航空機製作所の最新配置図等を用い、熊本市近隣で最も敷地的にゆとりのある健軍に起工されたのが三菱重工業熊本航空機製作所である。三菱重工業所内では機体を生産する第九製作所と称され、兵器等製造事業特別助成法による官設民営の工場として建設、略号「カミク」（官設・民営・熊本工場）とも呼称
- 1944年4月29日には、陸軍四式重爆撃機「飛龍」（キ-167）一号機の進空式が行われた。熊本製作所で敗戦までに46機（一部資料は42機）の飛龍が誕生した。なお、本工場は1945年5月頃より防諜上「報国熊第一〇一一工場」と呼称された。昭和20年4月以降は、熊本市内・県央・県北の学校・空き工場への



写真1 熊本航空機製作所で生産していた「飛龍」
終戦時健軍飛行場に駐機する第百七十戦隊機

一次疎開、さらに地下工場への二次疎開が行われた。

□最盛期は、名古屋航空より180人の基幹工員指導者、昭和19年2月期従業員25,000人を目指とし、非従用者12,525人、女子挺身隊2,012人、学徒隊4,421人の「計18,958人」と記される。

(2) 県内に広がる「一次・二次疎開工場」

□軍需省による昭和20年2月23日工場緊急疎開要綱を受け、一方では健軍本工場への3月18日空襲により19人が死傷するにいたり、熊本航空機製作所でもいよいよ4月1日から学校工場・倉庫等への一次疎開を開始する。当時疎開本部で業務にあたった唐木文穂は「監督官と桜井京造部長が熊本師団に行き、疎開の応援を頼むことになった。その結果、四月の初め、三日間に亘り熊本師団から兵隊二千名、戦車、輜重車などの応援を得ることになった。この他消防団、五高の生徒などの応援を得て、工場にある機械設備、材料など殆ど全部疎開先に運び出され、工場はもぬけの殻となってしまった」と当時を回想している。また、熊航内の工場疎開計画委員会で疎開計画の担当者は「その日から蟻の引越しのような異状な疎開作業が昼夜兼行で実施されました。勿論二日間でというには無茶ですが、正味七日間で無事に全工場をすっかり空けてしまう事だけは出来ました」とある。

□この時期から始まった熊航第一次疎開は「相応の条件を考慮し健軍工場を中心に、熊本市内、大津、菊池、木葉、宇土、隈庄、御船の各地区を中心とした、それぞれの地区の工場、学校、倉庫の既存建物を利用し生産部門ごとにその拠点を移した」ものである。熊本地区を例にとると、熊本航空機製作所の下請け工場として既に稼働している熊本航空機・田迎航機の空き施設を活用し、五高・熊工専の広域な校舎実習工場施設の利用、さらには上熊本のグンゼ製糸工場跡の再利用、市内中央部から東部にある中学校・高等女学校八校の体育館・講堂・雨天体操場の利用である。このように地域ごとに生産品を出来るだけ集約し相互に関連づけ、学校工場（県内23校）を主体としながら、既存航空機工場（8箇所）や実働工場（4箇所）の空き空間、遊休倉庫（3箇所）利用を客体とした。

(3) 二次疎開「三菱龍田弓削地下工場」

□空襲激化に伴い45年6月頃から始まった二次疎開として半地下・地下工場が「県央・県北地区に7～12箇所」が造営された。全容は判明しないが、ここでは記録化された「龍田弓削工場」を記す。

□本地下工場は、熊本市龍田町弓削に所在する。「健軍三菱回顧史」の「報国熊第1011工場 第二次疎開工場計画概要 昭和20年6月26日作成」では、「供合・小峯」の名称で作業内容「組立・整備」と記載がある。また、別資料『現代史資料39 太平洋戦争5』「米軍戦略爆撃調査団報国書 第15巻航空機工場」には「下南部」の名称があり、面積は「計画14,200m² 実際1,900m²」、従業員は「計画250人 実際無」の記載がある。三菱疎開工場の地下工場の幾つかの工場は、掲載されている資料により名称記載が異なる場合もある。ここでは両地点が隣接することから同一名称とも考えられるが、証言等からも工場名に特定できないが「龍田弓削工場」と呼称する。

□昭和20年春頃「三菱の軍属が朝鮮の人も連れてきて、在郷軍人会も協力して掘った。小型の箱型トロッコがあり、出た碎石は崖下に落とし、今は自宅の盛土になった」の証言から、三菱の第二次疎開工場と特定した。

□学徒従用生の証言から、この部隊は「旧満州東北部で編制され、健軍飛行場に移駐した靖第八三一六部隊。満州人・中国人も軍属として多く配置。部隊長は谷口和男少佐。原水郵便局横の民家に本部を設置し、白川対岸の供合地区にも部隊三角兵舎が臨時に建てられていた」事が判明した。さらに「昭和20年6月に、旧九州中学校（現九州学園高校）3年の1・2組70名が学徒従用され、熊本県立工商学校（現熊本商業高校）からも2組の学徒従用班もあった。龍田弓削工場は一軍（イ）と呼称し、「発動機整備：イのハ・機体整備：イのキ」を編制、大津地下工場（菊陽町今石）は二軍（ロ）で同様の編制。航空機識別等の基礎座学中に敗戦。伝令要員として健軍飛行場より各種の資材をトラックで取りにいった事もあった。」

□ここ内部では健軍飛行場に配置された飛行場大隊整備兵の一部の約50人が、陸軍重爆撃機「飛龍」のエンジン整備を行う予定で、既に崖下の民家納屋には数機分の飛龍エンジンが到着し整備を行っていた。なお、飛龍は双発で、搭載発動機は離昇出力1900hpのハ104（「ハ42」11、四式一九〇〇馬力発動機）空冷18気筒二重星型発動機である。

□本地下工場は全幅46.1m、奥行き42.0m、阿蘇凝結凝灰岩に掘られており、上部の民家までの岩盤厚は最大19.4mで、弓削小坂横穴群（50基開口・古墳時代後期）と併存する。横穴壕は入口部、通路・工作室部、奥室部の3部で構成される。入口は4箇所設置され、飛龍発動機等の入室は、奥室に対し直線順路で搬入しやすい2号入口から搬入の予定であった。また、開削時にはここにトロッコ設置の目撃もある。1号入口は、1号工作室に連結する構造で全長19.4m×幅2.6m×高232m、断面方形である。直線箇所に旋盤等の工作機器を設置を坑木での支持を行う工作室としての使用予定であった。3号入口は他の入口より高所に位置し、通路部より四段の段差を有し、地下壕全体の換気口を兼ねた構造であり、非常用通路。4号入口は断面蒲鉾型で8.1mと最も短い。

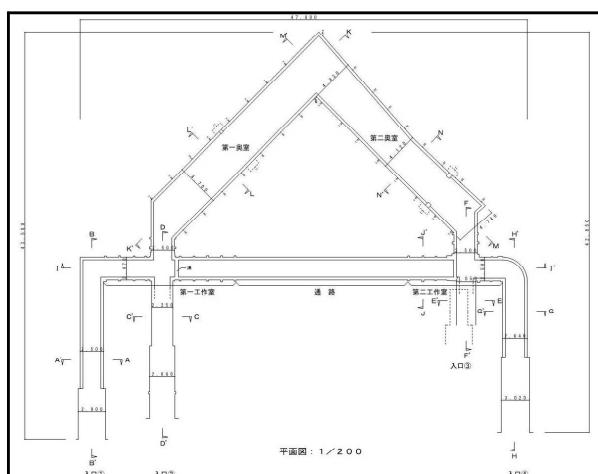


図1 熊本航空機製作所「龍田弓削工場」平面図

□龍田弓削地下工場は、飛龍エンジン組立・整備のための三菱疎開工場であり、稼働直前で敗戦となつた県内地下工場では、最も当初の現況を保持している地下工場である。

表1 三菱重工業熊本航空機製作所「第九製作所工場概況
疎開工場一覽」一次38箇所・二次11箇所『健軍三菱物語』より

3 第一組立工場の概要と歴史的価値

□本工場で生産された「飛龍」は、当時の日本の大型機としては初めての試みとして胴体部を分割式にした量産志向の機体であった。生産においては作業工程の分割・並行化、作業の近寄性の増大、組立治具の単純化、作業の機械化等が図られた。通称「大東亜戦争決戦機」の組立工場

□ 「第一組立工場」では、建屋中央の柱の左右2系列で最大6機が同時に組立られていたとされる。建屋は「桁往き223.2m、梁行き92.5m、全高約9.6m」と想定され、「床面積は19,440m²」を測り、飛行場出口側に面した北側鉄扉10枚と附帯施設は当時のままであり、採光のための三角の連続屋根24連と連結したトラス鉄骨が特徴的な鉄骨建物である。熊本県内軍需工場で、三角連続屋根鉄骨建物では唯一現存とされる。

□1956（昭和31）年7月建物の改修工事がなされ、梁側への出入口等が設置され、現在は、駐屯地車両の整備等が行われる「健軍支処棟」として利用。なお、本工場に関する「三菱側図面類」は残されていないとされ、「空襲時の弾痕等もある」とされるが、未確認である。

4 まとめ

三菱重工業熊本航空機製作所の敷地は、約40万坪で、現在跡地には陸上自衛隊西部方面総監部をはじめ、熊本市民病院、熊本市東区役所、九州運輸局熊本運輸支局、県立第二高校、熊本市立東町中学校等の公共施設・民間施設が立地する。また、健軍商店街地域一帯は、旧三菱社宅施設等である。

①本遺跡は熊本県・熊本市の近現代史を理解する上で、欠くことのできない遺跡で、学術上価値の高い遺跡・遺産である。戦争の実相を今に伝える「戦争遺跡・建物」である。

②三菱重工業熊本航空機製作所第一組立工場は、「熊本県内で唯一現存する建物」で「全国的にもほとんど残存例を見ない建物」、熊本で航空機生産を行っていたことを、現在に伝える最後の「歴史的建物」である。

③熊本市東部地域での土地区画の整備、市電の延伸、水道のインフラ整備、健軍町の街づくりや関連する熊本の航空機産業を伝える「象徴的建物」である。

[参考文献]

『新熊本市史』『近代III』『健軍三菱物語』『くまもとの戦争遺産』『熊本の近代化遺産 上巻』他



図2 工場レイアウト図 赤丸印が、現存する第一組立工場 写真2 健軍飛行場・三菱熊本航空機製作所・健軍街
写真3 第一組立工場北からの現存扉と全景 写真4 北西側角の当時想定小部屋 写真5 天井ガラス部からの
内部採光状態 写真6 中央部支柱の組合せ状況 写真7 現存する北側大型扉部状況と転輪